様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４９５

研究課題名（和文）上ソルブ語の語順に関する基礎研究―言語接触と情報構造の観点から枠構造を中心に―

研究課題名（英文）Basic research on the Upper Sorbian word order accounting for the frame structure - from the viewpints of language contact and information structure

研究代表者
笹原　健（Sasahara, Ken）

麗澤大学・外国語学部・講師

研究者番号：１０４３８９２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：上ソルブ語の語順について，おもに以下の2点を明らかにした。(1)ドイツ語の枠構造を想起させる文において，主節ではドイツ語と同様に，文の第2要素に助動詞が，文末に動詞の不定形が現れやすいことを統計的に示した。従属節ではドイツ語は主節と異なる語順を用いるが，上ソルブ語では主節と同じ語順を用いる傾向が見られる。その結果，ドイツ語との共通点と相違点を見ることができた。(2)付け足しやあとからの説明語句のように，文が終止したあとに何らかの文要素が述べられることがあるが，上ソルブ語においてもその出現を確認することができた。これらのことにより，本研究課題の所期の目標は概ね達成することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I investigated the word order of Upper Sorbian. Mainly the following points are argued. (1) In Upper Sorbian, the Rahmen-structure (sentence frame) of which German makes use is frequently observed. While the order of the verbal elements in the Upper Sorbian main clause looks quite similar to that in German, Upper Sorbian subordinate clause shows great contrast to German. Upper Sorbian subordinate clause uses quite often the same order in terms of verbal elements, which differs from that of German. (2) Some sentence elements can be uttered even if the sentence is completed. This research identified its occurrence in Upper Sorbian. Through these points, I evaluate that the aim of the project is roughly achieved, which will serve as further research in the future.

研究分野：言語学

キーワード：上ソルブ語　語順　言語接触　ドイツ語　情報構造

１．研究開始当初の背景

ソルブ語の語順は 19 世紀後半から問題になっているが，20 世紀後半の文法書では多くは記述されてこなかった。20 世紀後半に出版された二大規範文法(Faßke, Helmut, Grammatik der obersorbischen Schriftsprache der Gegenwart, 1981, Bautzen: Domowina と Šewc-Schuster, Hinc, Gramatika hornjoserbskeje rěče: 1. zwjazk – fonologija, fonetika a morfologija［上ソルブ語文法：第１巻－音韻論・音声学・形態論］, 1984 (1968), Bautzen: Domowina)では，単文の分析・記述に終始している。語順の記述においては，深く追求されておらず，個別的な文法事象を扱った研究も，管見によれば，ごくわずかな断片的記述を除いてなされていなかった。そして，現代ソルブ語の語順に関して，深く分析した研究は皆無に近い。そのため，上ソルブ語の語順を，情報構造の観点を加味して分析する必要が生じた。

２．研究の目的

本研究課題は，上ソルブ語における語順を，ドイツ語との言語接触と上ソルブ語固有の情報構造の観点から調査・分析し，記述していく。上ソルブ語の文要素間の語順は比較的自由であるが，好まれて用いられているものが観察される。そのひとつが，ドイツ語の枠構造を再現しているものである。先行研究では，上ソルブ語とドイツ語の相違点として，前者では主節のみならず従属節においても枠構造が用いられうると述べられている。申請者は，上ソルブ語の枠構造が標準化の途にある資料を持っており，言語接触と情報構造の観点から考察する。本研究は，研究期間後に継続して行う上ソルブ語の情報構造解明へのさきがけである。

３．研究の方法

本研究では，上ソルブ語における情報構造の概要を明らかにする基礎として，語順の解明をめざした。資料は，申請者のフィールドワークによって得られる一次資料をもとに考察する。フィールドでは，調査協力者との 1 対 1 での対面調査ならびに複数名が集まる場での会話を資料として収集し，分析を行った。研究期間 1 年目は動詞部について分析を行った。2 年目は名詞句の出現位置を中心的考察対象とした。その際，統語的要因や談話的要因といったさまざまな要素を排除することなく，分析を進めることに留意した。また，最初の 2 年間は先人たちの言語類型論的成果ならびにドイツ語の研究成果を精読し，ソルブ語調査の参考にした。最終年度の 3 年目は，総合的分析にあて，論文として成果の公開を目指した。

４．研究成果

本研究期間では，おもに(a)ソルブ語における「枠構造」の記述を精緻化と(b)文が完結したあとに現れる文要素の概略を記述すること，の 2 点を行うことができた。

枠構造に関する成果は以下の通りである。上ソルブ語の語順は文法的に定められておらず，比較的自由である。たとえば，「ヤンが本を読んでいる」という文を上ソルブ語で表そうとすると，以下の 6 つの可能性がある：

Jan čita knihu.（ヤン.主格 読む 本.対格）
Jan knihu čita.
Knihu čita Jan.
Knihu Jan čita.
Čita Jan knihu.
Čita knihu Jan.

これらの語順のいずれもが，同等に使われうる。話し手がどの語順を選択するかは文法によらず，文脈や話し手の意図といった語用論的要因に基づいている。ただし，文脈によらず，もっとも自然に用いられるのは *Jan knihu čita.*だと言われている。

それに対し，上ソルブ語に隣接しているドイツ語の語順は，少なくとも動詞部については文法によって定められている。ドイツ語の主節において，動詞部が助動詞＋動詞という分析的表現は，文第 2 位に定形助動詞が，文末に動詞の不定形が配置され，ドイツ語学はこの構造を枠構造と呼んでいる。この枠構造は，上ソルブ語においても，高い頻度でその出現が認められる。自身の収集した話しことばコーパスでは，以下のような例文がある：

Potom [**je** pak jedne dźěćo **řijěło**], kotr... alzo, te dźěćo [**su** zawěsće te krušwy **wabili**].（そのあと 助動詞 小辞 1 人の.主格 子供.主格 来る 関係詞 間投詞 その.対格 子供.対格 助動詞 きっと その.主格 梨 引きつける）「そして一人の子供がやってきて，その子供はきっとその梨に引きつけられたのだろう」。

この文は，同じ語順でドイツ語に翻訳しても適格な文である（Dann [**ist** doch ein Kind **gekommen**], das ... also, das Kind [**haben** die Birnen bestimmt **gereizt**].）。このことは，上ソルブ語文法がドイツ語文法に近づいていること，そして，ドイツ語文法が上ソルブ語文法に近づいているのではないという一方向性を示唆している。

主節と従属節を比較してみると，主文においては圧倒的多数の文で枠構造が用いられていた。副文においてはその比率が下がるものの，半数近くの例が枠構造を用いている。また枠構造を用いていない文は，統語的あるいは語用論的な観点から説明可能なものもあった。従来言われてきたような枠構造の使用の広がりがさらに進んだ状態にあるといえる。

枠構造の使用に見られる上ソルブ語の語順は，言語接触による影響を大いに考慮する必要がある。ソルブ語話者はドイツ語との二言語使用者である。Heine und Kuteva (2006: 49)の言を借りれば，ソルブ語枠構造は文法的複製(grammatical replication)の現れであると見ることができる（以下の言語変化プロセスである：a language, called the replica

language (R), creates a new grammatical structure (Rx) on the model of some structure (Mx) of another language, called the model language (M))。
考えられるシナリオのひとつは，19 世紀半ばごろには広がりを見せてきた枠構造が，少なくとも主文においては，現代に進むにしたがってより強固になり，ゆっくりと標準化に向かっていると考えられる。これまでソルブ語の語順研究において文脈や情報構造といったテキストレベルの深い考察はなされてこなかった。本研究課題では言語接触の観点から若干の考察をおこなうことができたが，まだ不十分であり，今後の課題としたい。
文が完結したあとに現れる文要素に関する成果は以下の通りである。
話し手が文を発して完結したあとに，現れる要素は，大きく分けて(a)話し手の心的態度（モダリティ）に関するもの，(b)発出した文に関する追加的な情報に関するもの，の 2 つが認められる。前者の典型的な例は付加疑問表現で，上ソルブ語では haj「はい」，abo?「または」，ka[k]?「どのように」，heno?「でしょ？」などが用いられる。後者の典型的な例は，あとからの思いつきや，その文で用いられた語句の言い換えや，より詳細な説明である。上ソルブ語では，関係節や属格名詞句，他の語による言い換えなどが用いられる。また，文中で指示代名詞 tón「その」を代名詞的に用い，文が完結したあとにその tón の指示対象を名詞句で説明することも該当する。
心的態度を表す例は，話し手が聞き手に対して確認や念押しをしたり，同意を得たりする場合である。具体的には，次のような文である：

Ha tak woni dźeja wróćo tam, k tóm štomej, hdźež jo tón, e, tón tamón muž te krušwy šćipał, a tón sej potom mósli, zo je, ym, zo su woni te krušwy kradnyli, **haj**.
「そして，このようにして彼らはその場所，この，ええと，男の人が梨を摘んでいた木のところに戻ってくる。そして，この人は，ええと，考える，彼らがその梨を盗んだと，はい」

ここでは，文が完結したあとに間投詞 haj「はい」が添加され，聞き手に同意を求めている。このような例は，文は完結しているが，発話は完結していないといえる。
追加情報を与える例は，話し手が文で言及した文要素の内容をより詳しく説明したり，自分の発話の内容を聞き手が理解していないと判断したようなときに用いられうる。具体的には，次のような文である：

Ha nadobo přijědźe jen hólc zys jenym kolesom, **z-m čyr[wj]enym kolesom**.
「そして，突然，一人の少年が自転車でやってきた，あの赤い自転車で。」

ここでは，zys jenym kolesom「1 台の自転車で」を用いて文を完結させたあとに，z-m čyr[wj]enym kolesom「その赤い自転車で」と情報を加えたうえで言い直している。このような例は，文が完結し，発話は完結しているが，さらにその発話に関する情報を付加しているといえる。
上ソルブ語では，文が完結したあとにさらに文要素が用いられる例は決してまれではない。この問題は，言語の線条性との関連で考察すべき点である。そして，1 つは話し手が考えている「文らしさ」という要因がはたらいていると考えられる。枠構造のように，文末に配置されている要素が決まっていれば，話し手・聞き手双方が，どこで文が完結するかが容易に判断できる。しかし，話し手には，思いついた語を次から次へと発することが可能である。それでも無秩序に発することはなく，ある程度の文法的容認度を備えたうえでの付加語句であると考える。文が完結したあとに現れる文要素が持つ性質は，上ソルブ語だけにあてはまるものではなく，人間言語一般にあてはまるものかもしれない。
以上をもって，所期の目標はおおむね達成できたと評価している。

参考文献

Heine, Bernd, und Tania Kuteva (2006): The Changing Languages of Europe. Oxford: Oxford University Press.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① 笹原健，上ソルブ語における「枠構造」，ドイツ文学，査読有，第 150 号，2015，91-111
② Sasahara, Ken, Die Rahmenkonstruktion im obersorbischen Hauptsatz – Ein Vergleich mit dem Deutschen, *Germanistische Mitteilungen*, 査読有, 40 号, 2014, 51-64.

〔学会発表〕（計　4 件）

① Sasahara, Ken, What can be added in a sentence when it is completed? - Evidence from Upper Sorbian Pear stories, 4th European Conference on Cognitive Science/ 10th International Conference on Cognitive Science, 2015 年 9 月 25-27 日，トリノ（イタリア）.
② Sasahara, Ken, The constituent order in Upper Sorbian – a frequency approach, The International Council for Central and East European Studies IX World Congress in Makuhari, 2015 年 8 月 3-8 日，幕張メッセ／神田外語大学（千葉県千葉市）.
③ Sasahara, Ken, Die Wortfolge im obersorbischen Nebensatz unter besonderer Berücksichtigung der Rahmenstruktur – Wie weit Obersorbisch vom Deutschen beeinflusst wird?, Wpływy języka

niemieckiego na strukturę gramatyczną i leksykalną dialektów słowiańskich, 2014 年 5 月 12-16 日, ポズナニ（ポーランド）.

④ Sasahara, Ken, The Rahmen-Structure in German, Colloquial Upper Sorbian of Young Speakers, and That of Middle-Aged Speakers: on a Corpus-Based, Contrastive Approach, The 7th edition of the International Contrastive Linguistics Conference (ICLC 7)/ The 3rd edition of Using Corpora in Contrastive and Translation Studies (UCCTS 3), 2013 年 7 月 12 日, ゲント（ベルギー）.

６．研究組織

(1)研究代表者

笹原 健（SASAHARA，Ken）
麗澤大学・外国語学部・講師
研究者番号：10438921

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：